

家政婦紹介所から大転換、今や文京区福祉では有名人。 区内に3つしかない小規模多機能にも挑戦する

(有) ケアワーク弥生 代表取締役 飯塚美代子

地下鉄南北線の東大前駅から地上に出て本郷通りを左折、ゆるやかな下り坂。東京大学に挟まれた形で下って行くと、左手に「ケアワーク弥生」の看板があるビルに出会う。弥生町といえば、弥生時代の土器が出土したことで有名なところである。

小柄ながら上品な感じの飯塚さんが代表取締役。にこやかな挨拶から始まった。「もともとは、主人の母がこの地で家政婦紹介所を開いてまして、私はひたすら子育てに専念してたんですよ」と笑う。

昭和28年から家政婦紹介所を開いていたというから、老舗である。近くに東大病院などがあり、いわゆる病院の付き添いなどが主な仕事だったそうである。

「母が亡くなって、わたしがその後を継ぎました。法人化したのは、平成5年です。病院の付き添いが廃止になりましたからね。そ



飯塚代表取締役

の時はどうしようかという思いでしたけど、今となっては良かったのではないかと思いますね」と振り返る。さらに平成9年には有限会社「ケアワーク弥生」として再スタートを切ったのだそうである。

平成12年、介護保険制度の施行と同時に参入したのだという。「まず、新しい制度ではケアマネジャーがいなくては話になりませんでしたから、最初のケアマネの試験を受けまして、運良くパスしました」と飯塚さんは言う。当時は登録のヘルパーの数は150人を数えたのだとも言う。「とにかく、ヘルパー2級の資格を皆さんにとってもらって、それは大変な時でした」。

飯塚さんの言う「大変」は、それまで家政婦として実績を積んできたベテランの人たちが、新しい制度の中に抵抗なく溶け込めるかどうかという点がある。「私には私のやり方があるというプライドもありますしね。それでも、とにかくヘルパー2級を取得してもらうことからはじめました」。古くから家政婦の実績のある人と新しくヘルパーになった人たちとの「統一」が難しい舵取りとなったことは容易に想像できる。

「技術研修が重要でした。うちでは技術試験をやって、パスすればお給料が上がるというシステムを導入したのです」という飯塚さん、なかなかの経営手腕なのである。『やよいハンドブック』というルールブックをつくり、それに沿って介護サービスを行うことにして

いるのだそうである。

今や文京区内では“老舗”といわれるまでとなった。安全・安心の信用が高い「ISO 9001」の認証を取得しているという点も注目に値する。「ええ、平成15年にトライしたのです。これは社員たちからの声に押される形でやりました。社会的地位と誇りを持てるようにとの願いからのトライでした」と飯塚さん。「いろいろな方たちからのサポートがあればこそですね」と周辺への配慮も忘れない。

飯塚さんの介護に対する想いを聞いた。「誰もが最後は在宅で、家族に囲まれながら迎えたいと願うものですよね。ですから、私は“在宅”にこだわるのです」。

訪問介護については、『家族会』を作り、職員と家族と利用者が一緒に写真を撮ったり、見せ合ったり、それぞれの生活スタイルをアピールしたりするのだという。

最近では、『看取り』をテーマに家族の深刻な様子や表情を知らせるというシリアスな問題に正面から向かい合ったのだそうである。

「ご利用者の方と仲良くなるのが重要ですね、こうしてあげたいと思うようになりますからね。でも、そうすると、介護保険制度には限界がありますね」と指摘した。

飯塚さんには、その人の『生活』を支えなくてはという強い思いがある。「文京区の高齢者の方が外で生き生きとリハビリが出来るような形のものを作りたいと文京区にお願いしているんです」。飯塚さんは文京区内の福祉に関してはすでに有名人。

障害者福祉にも介護保険制度の以前から携わってきた。「母の言葉ですけど、儲けることを考えたらダメですね」と笑顔を見せた。

ケアワーク弥生では、『ユアハウス弥生』という小規模多機能型居住介護拠点を運営している。これは、地域密着型サービスの一つで、介護が必要となった認知症の人たちなどが今までの人間関係や生活環境を出来るだけ維持しながら「通い」を中心に「訪問」「泊まり」の3つのサービスが24時間切れることなく提供できるというもの。



『ユアハウス弥生』の所長である飯塚裕久さんは美代子さんのご子息。「平成18年の2月にオープンしました。文京区にはまだ3ヶ所しかありません。25名の定員で、現在は24名の方がいらっしやっています」と歯切れよく説明する。

今年34歳になるという若き後継者。「医療関係の仕事をやってきましたが、人と接する仕事、人間的な仕事をやりたいと思いました」と動機を語る。

“普通の生活”というものがどれだけ大変なこと、どれだけ大切なことなのかを学んだとも言う。以来、勉強してケアマネの資格を得たという。

「その人の生活リズムというのでしょうか。ライブ感が見えるような介護をやりたいですね。出来れば、街中を巻き込んで要介護者に優しい街づくりもしたいです」と若らしい意見を披露した。

歯切れよく、礼儀正しい所長を、目を細めて眺めながら微笑んでいる社長であり、母である飯塚美代子さんである。

同じ介護福祉に携わるものとして母をどのように思っているか。「いやあ、とても足元にも及びませんが、最近では多少、提案などが出来るようになってきました」と裕久さんは言う。立派な後継者を得、一安心とも言える美代子社長だが、まだやりたいことはたくさんあると意気は高い。

(ジャーナリスト 中山賢介) □